

LEADERS NOW!



せっかくするなら 楽しんだ方がいい!

就活する後輩をバックアップ

●社会学部4年次生
山本 菜子美さん

大学入学時から自身のキャリアデザインを考え、満足のいく就職活動を終えた山本さん。現在は、自分の経験を活かして後輩たちにアドバイスをするキャリアサポーターとして活躍している。大学生活のなかで社会を見据えつつ、就職活動の準備を進めたことから見いだした「就職活動の楽しさ」とは?

山本 菜子美—やまもと なごみ
■2001年広島県生まれ。広島市立基町高等学校卒。関西大学社会学部2年次生で「キャリアスタートプログラム」に参加。30社近いインターンシップ経験と積極的な就職活動で、地元・広島に在籍。現在は後輩たちの就職活動をバックアップする「キャリアサポーター」として、講演会やイベントの企画運営など積極的に活動を行っている。



1.就職活動の体験談を講演 2.後輩の就活生たちへアドバイス 3.企業からの課題についてのプレゼンで優勝。チームリーダーとして表彰を受ける様子

就職活動を終えた山本さんはキャリアサポーター、通称「キャリアサポ」として、これから就職活動を始める、また就職活動中の後輩に向け、自身の経験を踏まえてアドバイスやサポートを行っている。

個別相談の他に、2年次父母・保護者を対象にした「キャリアプランニングセミナー」や広島で開催された「地方教育懇談会」といった行事で就職活動時の体験談を講演。またイベントなども企画し、「面接で聞かれる質問ランキング+ワンポイントアドバイス」「面接直前・前日のチェックポイント」など、いずれも就活生のニーズに寄り添った内容を企画した。

「色々な事例を具体的に紹介したり、直接アドバイスもしました。個別相談で『お話を聞けて良かったです』と言ってもらえることもあり、サポートする側になってみて自分の経験が次の世代ともいえる後輩たちの役に立っていることを実感できてやりがいがあります。」

最後に後輩たちへのメッセージを聞いた。「伝えたいのは『自分らしく楽しんで就活しよう』ということ。私は就活のための就活ではなく、自分や社会の将来のために、こんな価値を届けたい、と内定の先の実際に働くことを考えて活動したから、楽しく集中して頑張れました。皆さんにも自分を素直に表現しながら希望の進路に向かってほしいです。」

「大学受験の次の目標は就職活動。入学した当時はコロナ禍だったんですが、十分な準備をしたいと考えていました」という山本さんが参加したのは『企業連携型キャリアスタートプログラム』。

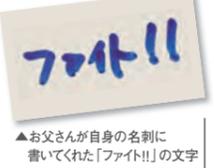
働くことについての価値観や就職活動の心構えを学び、企業から出された課題についてチームで取り組むキャリアセンター主催のプログラムだ。山本さんはチームリーダーとなって文具メーカーからの「大学生の新しい学び方を実現するプロダクト」の商品企画について仲間と取り組んだ。

「みんなで夢になってアイデアを出し合い、あれこれ意見を交換した時間は貴重だったし、チームごとのプレゼンで優勝できたことが本当に励みになった」。自身の就職活動ではガクチカの一つとしてこの経験を挙げた。

地元に関わり立つ仕事に就きたいという思いから、エントリーしたのはすべて地元・広島が拠点の企業。その一つは、山本さんのお父さんが働く会社だった。「父が誇りを持って働く姿をずっと見ていたし、子供の頃から『同じ会社で働けたらいいな』と思っていたんです」。

最終面接の際には、自分の名刺に「ファイト!!」の文字を書いてお守り代わりに渡してくれたというお父さん。内定を受けた際は自分ごとのように喜び「頑張ろうね」とメールを送ってくれたことに山本さんの喜びもひとしおだった。

2年次の秋頃からインターンシップに参加し始め、内定が出たのは4年次の6月。その就職活動期間を振り返ると「楽しかった」の一言に尽きるのだそう。社会人の価値観や考え方を聞いたことや、知らないことに新しく触れたことは新鮮な経験として心に残っている。



▲お父さんが自身の名刺に書いてくれた「ファイト!!」の文字

今年はダントツで 須田やったな

チームでも日本一を目標に

●文学部3年次生
須田 啓太さん

関西大学体育会アメリカンフットボール部は、2023年のリーグ戦で13年ぶり7度目の優勝を飾った。だが、3大学が同率で優勝した結果、規定により抽選で、惜しくも学生日本一を決める「甲子園ボウル」の出場を逃した。個人では年間最優秀選手に選ばれた須田啓太さんは「チームの日本一が第一。今年こそは」と決意を新たにしている。



▲学生アメリカンフットボールの年間最優秀選手に与えられるミルス杯を受賞した須田さん

剣道選手の両親のもと、幼いころから高い運動能力に恵まれた。野球をすれば身体能力が必要な投手や遊撃手を任された。転機は小学5年生。地元の体験会でアメフトの存在を知った。「最初はラグビーとの違いも分からなくて……『防具が格好いいな』と思う程度だったんですが、次第に頭と体を高いレベルで使う競技そのものに魅力を感じるようになりました」。中学校では部活で軟式野球、校外のクラブチームでアメフトと「二刀流」を実践していたが、「もっとアメフトが上手になりたい」と思い、高校からアメフト一本に絞ることを決めた。

中学生の時は全国的には無名の選手だったと言う須田さん。当時の関西大学第一高等学校アメリカンフットボール部の磯和雅敏監督(現・関西大学アメリカンフットボール部監督)から「一高でやってみないか」と誘いを受けた。「活躍もしていないのに声を掛けてくれたことを恩義に感じた」と言い、関西大学で学生日本一を目指す物語が始まった。

才能は高校入学後に花開く。攻撃の起点となるQB(クォーターバック)に必要な長距離を投げきる肩の力、自らボールを持って走る足の速さ。そんな「パス」と「ラン」どちらの能力も兼ね備えた万能選手として、チームの主力を担った。大学入学後は1年次から試合に出場し、「期待の若手」として取り上げられることが増えた。

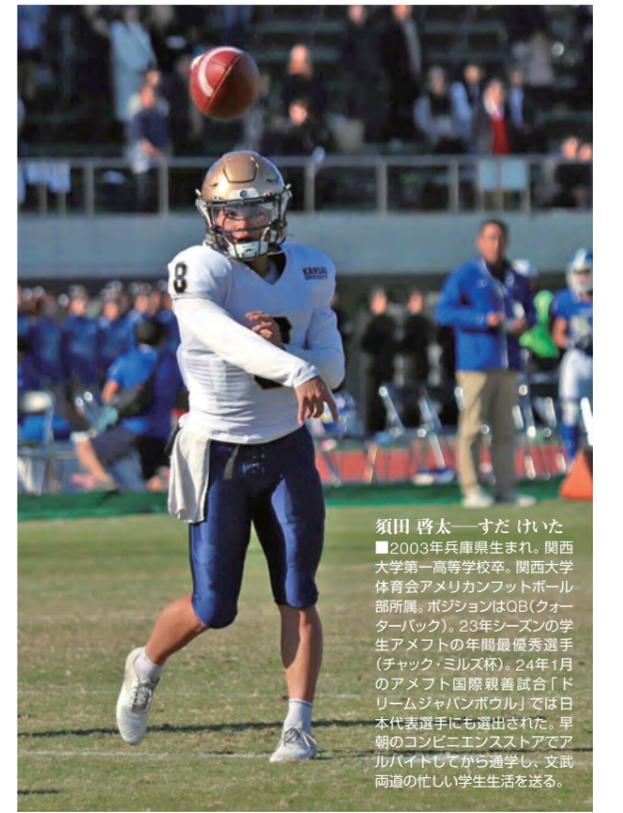
2年次に不動のQBとなると、3年次には走りながらパスを出すランニングスローの精度を高め、学生アメフト界で注目の存在に。自らを人見知りな性格と分析するが、「不思議なことに、アメフトのことで気になったことは誰にでも聞けるんですよ」と笑う。それがライバル大学のエースだろうと、高校で同じくQBを務める弟の隆介さんであろうと。「僕はプレーに気持ちを乗せるのは



得意でも、クレバーさはイマイチ。その点、弟は試合中も冷静なので参考になります。何でも吸収しようという貪欲さが、彼の成長を後押ししている。

「僕は出会う人に恵まれてきました。先輩、コーチ、監督、みんなが真剣に僕に向き合ってくれた。支えてくれる家族の存在も大きい。1月に日本代表選手として出場した国際親善試合には家族総出で東京まで応援に来てくれた。「感謝しています。だからこそ、結果で恩返しをしないと」。そのためにももっと結果にこだわる1年にするつもりだ。

学生ラストイヤーに目指すのは日本一。そして「今年はダントツで須田やったなと言われたい」と宣言する。社会人・Xリーグで日本のアメフト界を引っ張るという夢を実現する前に、まずは学生アメフトで全力を出し切るつもりだ。



須田 啓太—すだけいた
■2003年兵庫県生まれ。関西大学第一高等学校卒。関西大学体育会アメリカンフットボール部所属。ポジションはQB(クォーターバック)。23年シーズンの学生アメフトの年間最優秀選手(チャック・ミルス杯)。24年1月のアメフト国際親善試合「ドリームジャパンボウル」では日本代表選手にも選出された。早期のコンビニエンスストアでアルバイトしてから通学し、文武両道の忙しい学生生活を送る。